

北陸がんプロフェッショナル養成プログラム「がん患者さんの声からつくる支援のかたち」：
イギリスのマギーズセンターから学ぶ環境・空間・ひと

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 天野, 良平, 榊原, 千秋 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/24328

『学会開催報告』

北陸がんプロフェッショナル養成
プログラム「がん患者さんの声から
つくる支援のかたち」～イギリスのマギーズセンターから学ぶ
環境・空間・ひと～*Gan-pro (cancer professional training) program
in Hokuriku. -Special talks about Maggie's cancer
caring centre, a place for you to come whatever
stage you are at with cancer and find the support
you need, think about our cancer support.-*

金沢大学医薬保健研究域

天野良平, 榊原千秋

平成22年2月20日、北陸がんプロフェッショナル養成プログラム市民公開講座「がん患者さんの声からつくる支援のかたち」を北國新聞赤羽ホール交流ホールで開催した。

平成19年4月にがん対策基本法が制定されて以来、がん対策推進計画によって、がん患者及びその家族の苦痛の軽減ならびに療養生活の維持向上を目指した緩和ケアの推進がすすめられている。再発におびえながら通院を続けたり、治療方針を誰にも相談できずに苦しむなど、深い苦悩を抱える患者や家族は多いといわれており、緩和ケアの推進は、地域における医療機関と連携した総合的な在宅緩和ケア推進が求められる。その先進的取り組みについて英国のがん患者支援センター「マギーズ・キャンサー・ケアリング・センター」(以下、マギーズセンター)の取組みから学ぼうと、マギーズセンターの最高経営責任者のローラ・リー氏と事業開発ディレクターのサラ・ピアード氏をお迎えしご講演いただいた。また、日本のがん患者支援の状況ががん患者支援の第一人者の淀川キリスト教病院がん看護専門看護師の田村恵子氏、白十字訪問看護ステーション総括所長の秋山正子氏からご講演いただいた。

会場の準備にあたっては、マギーズセンターを模し、来場者誰もがリラックスできる空間を意識してセッティングした。マギーズセンターの写真パネル展、がん患者や家族の支援の事業紹介、保健学類図書館にある闘病記ライブラリーの出張図書コーナー、各種パンフレットコーナー、カフェコーナー等を設けた。会場のあちこちで会話が弾み、来場者ひとりひとりが笑顔でくつろいでいた。講演の間にはコンサートもあり、ゆるやかなピアノとチェロの音色が会場を温かい雰囲気包み好評だった。

ローラ氏は、マギーズセンターの設立の背景や目的、活動の概要について語った。マギーズセンターは、現在全英に9ヶ所、香港1ヶ所で展開されている。マギーズセンターは、乳がんで再発を繰り返したマギー・ケズウィック・ジェンクス氏が生前に描いた青写真によって、その遺志を引き継ぎ1996年にエジンバラのウエスタン総合

病院の敷地内に設立された。設計はマギー氏自身が病床から友人の建築家に依頼した。ローラ氏は、マギー氏をがん専門看護師として担当していた。マギー氏はローラ氏に「この病院では治療はして下さっているけれども、わたしが家族に対してしてあげたいことや自分自身のためにどうしたらいいのかという支援や情報は与えられない。心理的なケア、感情面でのケアが、この病院ではなされていませんね」と話した。中でも一番大事だったのは「死の恐怖の中にあっても生きていくことの喜びを失わないこと」という考え方で、マギーズセンターの哲学となっている。そしてさらにマギー氏は「自分自身を取り戻せる小さな家庭的な安息所が欲しい」と強く願っていたのだそうだ。

イギリスにおいても病院で医師から告知を受ける時間は5分から7分で、相談支援にかけられる時間も少ない。こういった病院の現状のギャップを埋めるのが、マギーズセンターの役割である。マギー氏は、がんの再発と闘いながら、ローラ氏や医師とマギーズセンターの原型となるがん相談支援センターの青写真を描いていった。マギーズ・センターという名は、「自分達の出発点を忘れないためにマギー氏の名前をセンター名にした」のだそうだ。ローラ氏は、マギーズセンターは、がん患者さんの視点から出発したのだということを強く語った。

マギーズセンターは、環境の力を重視していることが大きな特徴である。マギーズセンターの環境は、人々に刺激を与え、動機付けを与え、気分を高揚させる。一方で、自分についてじっくり考え、自分の人生の意義を考えることができる場所でもある。マギー氏は、造園家で中国庭園の研究家だった。マギー氏は生前「建築と環境が人間の心に深い影響を与える」と考え、精神面を刺激し回復させるような建築にすることもセンターの大切な目的とした。そのようなマギー氏の思いに賛同した著名な建築家たちが、すべてのマギーズセンターを無償で設計している。サウス・ウエスト・ウエールズに建築中のマギーズセンターは、黒川紀章氏が設計したものである。どのマギーズセンターも建築家の自由な発想に委ねられている外観は創造力にあふれておりとても印象的である。一方、内部空間は、利用する人々が安心して訪れることができるよう家庭的な雰囲気を大切にされている。玄関から、人々の精神を解放し患者さんの気分にも深い影響を与える空間である。建物の広さは約280m²、清潔なキッチンと大きなテーブル、どの部屋にも自然で明るい光が差し込む大きな窓、薪ストーブのある居間、自分の家にいるような感覚で相談をしたり、プログラムを受けることができる。すべてのマギーズセンターが日本というところのがん拠点病院の敷地内に建築されており、患者や家族が通院や見舞いのついでに立ち寄ることができる。また、センターのスタッフと病院の医療スタッフが連携しながら支援を行なえるなどのメリットがある。センターが患者と病院をつなぐ役割を果たしている。

マギーズセンターは、がん専門看護師や臨床心理士、ソーシャルワーカーはじめ4から6人の専門家によって運

営されている。本当に日々毎日人々が感じている気持ち、基本的な気持ちを支えていこうというのが大切な考え方である。がん患者とその家族、友人、遺族、ケア従事者を対象とした、カウンセリングや栄養指導、ヨガ、太極拳、子どもへのケア等のプログラムがすべて無料で提供されている。専門スタッフは、訪れた人に旧知の友人や家族のように優しく、訪れた人の思いに寄り添い見守るとともに、いつでも治療法の選択や精神的な苦痛や不安、経済的な問題まであらゆる相談に乗っている。ローラ氏は、「マギーズ・センターには、がん患者さんやその周囲の方々が抱く喪失感や絶望感、無力感といった苦悩に対応するため、心理的サポートや感情面でのサポート、情報の提供や実際的な支援、また生き方、ライフスタイルについてのアドバイス等、さまざまなプログラムが用意されています。どのがんの患者であっても、がんがどのステージであっても、自分自身が必要とする限り支援を続け、がんになっても患者さん自らが、自分本来の力を取り戻し、生きていけるように支援しています」と語った。

事業開発ディレクターのサラ氏は、マギーズセンターは、がん拠点病院の敷地内に立地しているが、独立した組織であると語った。マギーズセンターの全英への広がり、地域のNational Health Service (以下、NHS) で自分の地域にがん拠点病院のそばのマギーズセンターが必要であることが話しあわれることから始まる。その決定は、NHSからマギーズセンターの総括本部に連絡が入る。次にがん拠点病院の医師、事務長、がん専門看護師、マギーズセンターの事業開発ディレクター等で開設のための準備委員会が設立される。マギーズセンターの運営費は、年間25万から35万ポンド(1ポンド約135円)が必要である。その運営費は、チャリティーイベントや寄付など地域社会からの支援によってすべて賄われており、年間を通じてさまざまなチャリティーイベントが行なわれている。サラ氏は、「将来は、英国のすべてのがん拠点病院にマギーズセンターが設置されるだろう。日本でも、がんになった時の苦悩はいっしょであり日本のがん患者にも同じく必要な支援であろう」と語った。

白十字訪問看護ステーション所長の秋山正子氏は、訪問看護の実践の中で「病院では、病人らしくしていなければならない気持ちになっていなければならないけれど、家に帰ったら忙しい」と生き生きとした表情で語る高齢の一人暮らしのがん患者の例をあげ、小さな希望を日々見出せる日常の大切さが自宅でのケアの中にあると感じると語った。また、病院で介護保険を申請するよういわれたけれど、まだ若い方は自分にはまだ関係ないと考え在宅医療そのものにも繋がっていかず、本当にギリギリになって困り抜いて訪問看護に繋がってくる方も多く、もっと早い段階で相談できる場所が必要だと語った。日本のがん患者の相談支援の現状について、がん診療拠点病院には相談支援の窓口の設置が、また都道府県は、在宅緩和ケア支援センターの設置が義務付けられているが、本当の意味での相談支援とは何だろうかと考えさせられる場面が多

いことを語り、日本では、がん診療拠点病院内の看護師や医療ソーシャルワーカーが相談に乗っているため院内のことは患者にとって語りにくいのに対し、マギーズセンターが病院の外にあり、独立した組織として運営されていることが、患者にとって大きなメリットであると指摘した。

淀川キリスト教病院の田村恵子氏は、ケア及びケアリングの視点にたった患者さんの支援を具体的に紹介した。マギーズセンターが、一人ひとりのニーズが何かということ把握しケアしていることが大切なことと述べ、最期の状態にある人のケアをしていく上で大事にしたい事柄を紹介した。それは、出来るだけの治療を受けること、自然な形で過ごすこと、伝えておきたいことを伝えておけること、先々のことを自分で決められること、病気や死を意識しないこと、他の人に弱った姿を見せたくないこと、生きている価値を感じられること、信仰に支えられることと述べた。医療者が、患者さんの人生を支えるということは、その人の大切にしていることに基づいた選択を支えていくことと締めくくった。

本市民公開講座は、「がん患者さん・家族の声からつくる支援のかたち」という保健学系で立ち上げたプロジェクトのメンバーで企画運営を行った。我々はここ石川で、マギーズセンターのような「ホスピタリティあふれる支援のかたち」を創り上げ、「生まれてから死ぬまで安心して生活し最期を迎えられるような地域社会の実現」に努めていきたい。

本市民公開講座の開催にあたり金沢大学の多くの皆様からご協力いただきましたことに深謝申し上げます。十全医学会のご後援に重ねて御礼を申し上げます。

